

「広島藩士 三好家文書展—三好長慶から信長・秀吉・浅野長勲まで—」開催中！

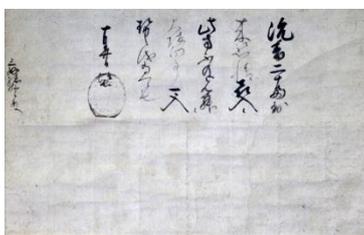
2015.4.30（レポーター 下向井祐子）

戦国大名三好長慶を祖とし、江戸時代には広島藩の有力藩士だった三好家。今回の収蔵文書展では、平成25年3月に三好家から当館に寄託された33点の古文書の中から、三好長慶書状、「天下布武」印のある織田信長の書状、羽柴（豊臣）秀吉の自筆書状など、広島では展示される機会が少ない貴重な中世文書を展示しています。

また、広島藩士時代に藩主から発給された黒印知行目録14通や、下賜された山水画、色鮮やかな広島城下の絵図、幕末の動乱期の緊迫した雰囲気や伝わってくる文書など、三好家で代々大切に伝えられ保存されてきた文書も見いただけます。

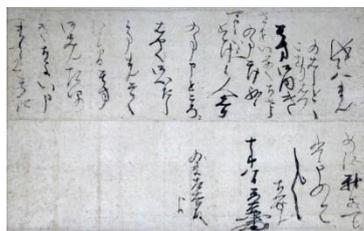
原文書ならではの迫力と魅力が満載の展示、その見どころなどを紹介します。

ここに注目①

信長の書状と秀吉の書状
比べてみると…。

織田信長黒印状

左上は織田信長が三好孫九郎に宛てて出した「天下布武」の黒印状です。孫九郎から高価な香木の沈香を贈られたことに対する実用的な礼状で、簡潔な表現に信長の決然とした性格が表れています。



豊臣秀吉自筆書状

左下は豊臣秀吉の自筆書状です。仮名文字が多く使われており、語りかけるような文体で、人と人の繋がりを大切にしたい秀吉の人柄を感じさせます。下克上の戦国時代にあって、自分の思いをストレートに伝えることで、秀吉は家来や武将たちの心をつかんでいったのではないのでしょうか。

VOICE

展示担当者にインタビュー！

Q：今回の展示では、全国に約120点しかないと言われる秀吉の自筆書状が公開されていますね。

A：お世辞にも達筆とはいえない秀吉が、なぜこの自筆書状を書いて送ったのか、思いを馳せると楽しいです。

Q：展示の準備で大変だったことは？

A：これまで中世文書を展示した経験がなかったので、武将の人間関係など、書かれたこと以外のいわゆる「行間を読む」ことに苦労しました。

Q：担当者おすすめの見どころポイントを教えてください！

A：幕末の広島城下絵図を展示しています。

被爆によって、広島は大きく変わりましたが、現在でも江戸時代の名残があります。絵図を現在の地図と比較しながら見ると、楽しめると思います。



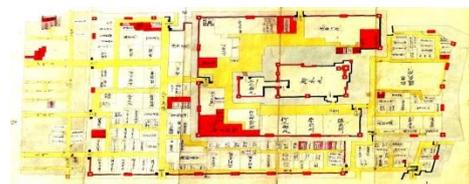
新聞やテレビでも、大きく報道されました。

ケーブルテレビの収録の様子です。展示担当者が信長・秀吉の書状や御城下絵図など、今回の展示の見どころを分かりやすく解説しました。

ここに注目②

カラフルな絵図で
幕末の広島城下にタイムスリップ！

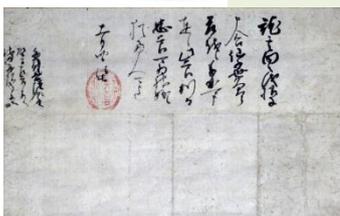
この「御城下侍屋敷新聞之絵図」は広島城下町を12に分けて、8色に色分けして描いた絵図で、折本仕立てとなっています。展示では、絵図の上下に町名や橋、現在の原爆ドームや縮景園などを分かりやすく示しました。地図上のお散歩をお楽しみください。



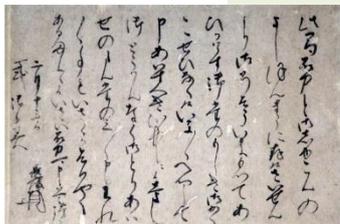
次ページでも、展示の注目ポイントや、来館者の声を紹介しています。

ここに注目③

紙の使い方 おりがみ たてがみ 折紙と縦紙



織田信長朱印状



三好長慶書状

左上の織田信長朱印状は、紙の上半分にだけ文字が書かれ、書状の真ん中をよく見ると、横方向の折り目があります。これは、紙を横半分折り、折り目を下にして文字を書いたもので、このような紙の使い方を「折紙」といいます。左下の三好長慶書状は、紙を折らずに上の端から下の端まで文字が書いてあります。この紙の使い方を「縦紙」といいます。

折紙と縦紙は、文書の内容や宛先の人物の身分などにより、使い分けられていました。

ここに注目④

花押と印章



三好長慶花押



織田信長朱印

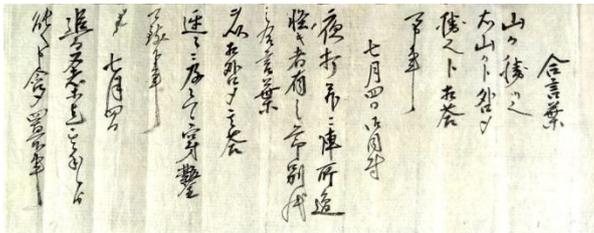


豊臣秀吉花押

展示されている書状には署名とともに花押や印章が添えられています。花押は、その文書がその人の意思で作成されたことを証明するものです。戦国時代には、花押に代わり、印章も用いられるようになりました。織田信長の「天下布武」の朱印状や黒印状も、祐筆（書記役の家来）が書いたものに、信長が署名・押印することで、その文書が信長の意思で発給されたことが示されています。

ここに注目⑤

幕末の長州征伐と「合言葉」



幕末、幕府軍と長州軍が戦った長州征伐では、三好家の当主も国境の警備に当たりました。この文書には、「山かと尋ねたら、勝つと答える。」という戦場での味方同士の合言葉が書き記されています。このほか、貝太鼓や釣り堀を叩く合図の取り決めなどを記した文書もあり、前線で臨戦態勢に入った当時の藩士たちの緊迫した状況を読み取ることができます。

ここに注目⑥

風雅な文芸

三夕の歌・藩主の山水画



浅野長綱紙本山水画

左は三好家四代当主が藩主浅野綱長から下賜された山水画です。下は『新古今和歌集』に選ばれた「秋の夕暮れ」を読んだ三首の和歌「三夕の歌」（藤原定家・寂蓮法師・西行）です。和歌とそれぞれの作者の肖像を折本に仕立てたもので、書は江戸初期の広橋兼賢、絵は土佐派の土佐光成が描いたとされ、風雅な気品が満ちあふれています。

三好家には、このような書画も、大切に保存されており、代々の当主が文芸に親しんできたことがうかがえます。

VOICE

…展示アンケートから… 展示来館者の声をご紹介します。

- ・文書展をいつも楽しみにしています。今回の展示では信長の天下布武の印、広島城下の古い絵図、起請文、広島藩士の知行目録などが興味深かったです。(50代男性・50代女性)
- ・展示の説明が分かりやすく、文書を理解しながら見ることができました。(20代女性・60代男性・80代男性)
- ・もっと多くの人にこの展示を知ってもらいたい。(70代男性)
- ・貴重な資料を直接見ることができました。この展示に感謝します。(70代女性)
- ・こうした文書が、文書館に保存され、展示公開されることは重要だと思います。(60代男性)
- ・歴史の記録文書を見ることは心の栄養。古き偉人達の当時の国を治める努力が伝わってきます。(70代男性)
- ・展示にリアリティがあり、当時の状況が推察されるレベルの高い資料だと思いました。(60代男性)



三夕の歌

三好家文書展は6月13日（土）まで開催しています。メールなどで瞬時に相手と繋がることができる現代社会では、手書きの手紙を書く機会は少なくなりつつありますが、個性あふれる戦国の武将達の書状は、自分の気持ちや意思を相手に伝え、相手の心を動かす手紙の力を私たちに語ってくれます。戦国時代から幕末の動乱期を経て現在に至るまで、三好家で大切に保存されてきた文書の豊かな魅力を楽しめる展示です。

たくさんの皆様のご来館をお待ちしています！